ホイットマンにおける自己のダイナミズム

山　内　　　彰*

Self-Dynamism of Walt Whitman

Akira Yamauchi

要約：19 世紀のアメリカを代表するウォルト・ホイットマンは、民主主義を歌い上げた先駆的詩人であると賞賛されると同時に、その最初期から傲慢である、自己中心的であるという批判も受けてきた。本論では、こうした批判がある程度当てはまることを新聞記事や日誌などから検証した上で、このような自己中心的な世界観こそが詩作の基盤をなしていることを論証した。そのために、アンソニー・ストーの芸術家の心理構造を説いた理論を応用し、ホイットマンの作家としての心理構造を分析した。

Abstract : Walt Whitman, an American 19th-century poet, is sometimes criticized as arrogant or self-assertive. In this thesis, it is suggested that this often-cited feature comes from his psychological background, especially his psychological conflicts between the awareness of the reality and the evasion into fantasy. The conflicts will be explained largely based on Anthony Storr's theory on self-realization. Whitman gradually completed his poetic styles and visions through the harsh experiences he faced during his careers, particularly when he tried to build his own poetic world.

Key words：アメリカ文学 American Literature　ウォルト・ホイットマン Walt Whitman

Ⅰ　序　　論

19 世紀を代表する、アメリカの詩人ウォルト・ホイットマン（Walt Whitman）の詩には、次のような有名な詩行がある。

Walt Whitman, an American, one of the roughs,
　　a kosmos　　　　　　　　　　（Cowley 48）

さらに、別のところでは、

I dote on myself. . . . there is that lot of me,
　　and all so luscious　　　　　　　（Cowley 49）

いずれの詩行をとってみても、何かひじょうに尊大で、傲慢な印象を受けるだろう。「ウォルト・ホイットマン」と自分の名前を詩のなかに登場させると、すぐ次の部分で、詩集の作者たる自分は「一つの宇宙」だと宣言する。詩人本人は、ちっぽけな人間などではなく、一つの「宇宙」に匹敵する存在だと主張するのである。と思えば、「私は自分自身を溺愛している」と平然と嘯き、自己への傾倒をまったく隠そうともしない。こうした様子をみていると、そこに激しい自己愛か、強烈なエゴイズムを感じざるをえないのではないだろうか。

ホイットマンの代表作『草の葉』（*Leaves of*

*関西福祉科学大学　社会福祉学部　講師

Grass）を読む際に、読者が感じる抵抗感の一つが、このようなエゴイズムの存在である。もっとも、ホイットマン自身はエゴイズムを嫌い、「ワーズワースのエゴイズムが彼の全作品を色づけしている」（Brand 218）といって、ワーズワース（William Wordsworth）を批判しているのだから、自分の作品をエゴイズムだと評されるのは心外なことに違いない。しかし、この種の批判は後を絶たず、彼の弟子たちはその防戦に躍起になることとなる。たとえば、トローベル（Horace L. Traubel）は「ホイットマンのなかにエゴイズムなど存在しない。ただ、個人の偉大な力を意識しているだけだ」（Trimble 19）と弁護している。こうした防戦にもかかわらず、まるで神のように万能にふるまってみせるホイットマンの「私」には、どこかエゴイズムか、自己愛のにおいがするといわれても仕方ないだろう。いや、詳しく調べてみると、この誇大な「私」にホイットマン自身取りつかれていたのではないかと思われるふしがある。1840年に彼は「僕がすごいことをできるんだと思っているからといって、誰にもうぬぼれているなどと非難されたくはない」（Holloway I 37）と書いているし、その翌年には「僕は本を書くんだ！　それがかなりいい本にならないなんて誰にいえるんだ？　僕が、尊敬されるような何かをすることなんてありえないなどと、誰にいえるんだ？」（Schyberg 44）と記している。

さらに、ワーズワースの「詩はもともと不人気だった」が、書き続けているうちに認められるようになったという部分にわざわざ下線を引っ張った新聞記事が、ホイットマンが集めた切り抜きのなかに残されている（Asselineau 293–4）のは、彼がそこに自分の現況を見出していたからではないだろうか。あるいは、よい画家が育たないのは「じゅうぶんな励ましがないからだ」と、1851 年に新聞にコメントした（Holloway 236）のは、いまだに認知されない自分の思いを託して記したものではないだろうか。

そう考えると、なぜホイットマンが『草の葉』以前の詩で、「野心」という問題にこだわったのかが見えてくるように思われる。

In that youth’s heart, there dwelt the coal Ambition,
Burning and gloving ; and he asked himself,
“Shall I, in time to come, be great and famed?”　(Brasher 21)

「若者の心には」燃えたぎる「野心」が住みついているというこの「野心（“Ambition”）」という詩の結末は、次のように締めくくられる。

And as these accents dropped in the youth’s ears,
He felt him sick at heart ; for many a month
His fancy had amused and charmed itself
With lofty aspirations, visions fair
Of what he *might* be. And it pierced him sore
To have his airy castles thus dashed down.
(Brasher 22)

一見すると、現実を知らぬ青年の未熟な心理的世界と、その崩壊を扱ったかにみえるこの詩も、上のような文脈から考えると、ホイットマンの心情をある程度反映していたのではないかと思われてくる。もし、仮にこのような文脈で考えることが許されるなら、ホイットマンは、若いころからかなり誇大化した、夢想的な「私」を有していたのだと考えてもよいだろう。

ホイットマンは『草の葉』の評判を高めるために、匿名で自分の著書の批評を新聞紙上に出したことがあったが、この点も彼のエゴイズムによるものであると批判される。だが、以上の文脈からすれば、少しでも自分を理解してもらうために、こうした行動をとったのだとわかるだろう。そして、この行為は一生続き、たとえば、1876 年に自ら「ホイットマンのアメリカにおける本当の立場」という記事を書き、彼の詩が「保守的なアメリカの作家や出版社、編集

者の断固たる拒否、嫌悪、侮辱にあっている」（Scholnick 233）と記している。つまり、自分は少しも正当な評価を受けていないのだと、周囲を批判しているわけである。

このように、ホイットマンの「私」には、本人やその弟子たちが奮戦したにもかかわらず、やはり誇大な自己があるように思われてならない。とすれば、いったい彼が描く自己とは何なのだろうか。それは、よく批判されるように、単なる自己愛やエゴイズムなのだろうか。本稿は、心理学的な知見も織り込みながら、この問題について検証するものである。

Ⅱ　空想と現実

心理学の考え方によれば、人間はその幼児期には自己愛的で、空想的な万能感のある自己を持つものらしい。概説的な言い方になるが、幼児は自己を世界の中心とみなし、万能感というううぬぼれを持っているものなのである。しかし、通常の場合、そうした万能感は、現実との交流によって放棄され、より現実的な自己評価へと置き換えられてゆくという。

> 好ましい環境のもとでは（自分たちの誇大な空想の自己愛的−顕示的表現に親が共鳴し参加してほしいという子供の要求に対して親が適切に選択して反応するような環境のもとでは）子供は自分の現実的限界を受け入れることを学び、そして彼らの誇大な空想や生のままの顕示性は放棄され、同時に自我−親和的な目標や意図、（社会）機能や活動の楽しみ、現実的自己評価に置き換えられる。
>
> （コフート 97）

万能感に満ち、自己愛的で、空想的な自己像は、時間とともに、己の限界や世界との境界線に気づきながら、より現実味のある自己像へと変化してゆくわけである。しかし、こうした過程を何らかの要因によって阻害されると、人は現実の世界から身を退けて、空想の世界で、その満たされなかった欲求を満足させようとする。フロイトは、この点について「不満を抱いた人間だけが空想するのだ。空想の動力は満たされぬ願望であり、どんなささやかな空想も願望の充足であり、満足を与えてくれない現実の矯正なのである。」と述べている。耐えられない現実に出会うと、人はいったんそこから退却し、空想の世界のなかでその願望の充足を図るというのである。とすると、ホイットマンが「野心」という詩のなかで「空想は自分を楽しませ、魅了した」と書き、「空中楼閣」について語るのは、彼のなかに満たされない願望があった証左ということになるだろう。フロイトは、さらに、芸術家とは、こうした空想に入れ込むものだとして、「作家は遊んでいる子供と同じことをしている。空想の世界を創りあげ、それについて真剣に考える。彼はその空想世界を現実から切り離し、そこに多量の情動を注ぎ込む」と続けている（ストー 114）。

このフロイトの分析をホイットマンに照射することによって批評を行ったのが、ブラック（Stephen A. Black）である。彼は、ホイットマンが自己愛的な空想世界を創り（Black 138）、「子供時代の両親との同一化は、ホイットマンが成長しても、ほとんど変化がなかった」（Black 158）と考える。いわば、ホイットマンの「私」は幼児的自己愛の再現であり、そこに描き出される世界とは、現実から撤退した自己が、願望充足のために創り出した空想世界だと解釈しているわけである。この見解には一理あり、確かにホイットマンも、他の芸術家と同じく、不足した自己愛を詩作を通じて充足しているだけかもしれない。だが、このような考え方では、いったいそもそもなぜ芸術家は虚構の世界を創造するのに命を懸け、多くの人間が芸術の創り出す虚構空間に惹かれるのかを説明することはできないだろう。芸術活動がただの現実世界からの逃避にすぎないというのでは、芸術の特質をとても言い尽したものとはいえないと思われる。

そこで、このフロイトの理論をストー（Anthony Storr）の理論を借りて修正してみよう。ストーは数人の作家の生涯を検討したうえで「多くの創造的な人々は、一人前のおとなとしての人間関係を結ぶことに失敗していること、しかも、そのなかの幾人かはまったく孤立していることが確かである」と認めている。しかし、「このことは、孤独で創造的に何かを追求することと、それ自体が病的ということを意味しないのである。」つまり、芸術には、フロイトが指摘する現実世界からの退行という意味の他に、自己実現としての場とでもいうべき意味が存在しているのである。

だから、仮に親がじゅうぶんなケアをせず、現実世界から逃避するようなことがあったとしても、それがただちに病的を意味することはない。場合によっては、その欠乏があるがゆえに、かえって想像力が発達し、芸術活動へと結びつくこともあるわけだ。

> 人間は、想像力を発達させたことで、人間的なものと同じように非人間的なものを、自己発達の主なる手段、つまり、自己実現へと向かう第一の筋道として使うことができるようになったのである。（ストー 128）

と、ストーはこの点をまとめている。言い換えれば、同じ空想世界といっても、フロイトが主張するような満たされぬ願望を現実から退行するかたちで充足しようとする世界もあれば、ストーが指摘するように、現実に得られぬ交流の代償として発達させた想像力が創造する芸術的世界も存在するわけである。

コフート（Heinz Kohut）はこうした点にじゅうぶん注意を払いながら、自己愛的性格者を論じた本のなかで、この誇大自己が病的どころか、想像力の源となっている一群の人々がいることに注目している。

> 自己が現実には不完全で限界をもつことを徐々に認識してゆくこと、つまり、誇大な空想の範囲と力が徐々に減少することは、一般にパーソナリティの自己愛的区域における精神健康のための前提条件である。しかし、この原則には例外がある。妄想的主張を伴った終始活発な誇大自己は、平均的な資質の自我であれば、その能力につよく障害が起こるだろう。ところが才能豊かな人の自我は持続する、ほとんど修正をうけない誇大自己の呈する誇大な空想の要求によって、その能力を最大限利用するよう迫られ、そして実際にきわだった業績をあげるかもしれない。
> （コフート 98）

ストーやコフートが主張するように、誇大な自己をもつということが、すなわち病気でないとすれば、さらに「きわだった業績」へと結びつく可能性があるものであるとすれば、ホイットマンの誇大な自己についても、同じような流れから検討しなおす必要があるだろう。そこで、次章では、この考え方に基づき、ホイットマンの誇大自己について検証をすすめたい。

Ⅲ　誇大化した自己と蒼古的対象

誇大化した自己の源泉は、コフートもいうように、幼年時代の空想的な自己にあるに違いない。けれども、ホイットマンの自我は、現実の世界を認知することや、その上に立脚して想像力豊かな世界を創り上げるほどに強固で、才能に恵まれていたのである。しかし、その一方で、同時にそこに幼児的な願望や空想がみられることも確かである。とりわけ、ホイットマンが描き出す「私」は、あらゆる対象物に同一化（identification）してしまい、まるで幼児が見せる自己–対象の融合を思わせる。コフートは、心理学的な意味でだが、こうした自己–対象の密着した自己のことを「蒼古的自己」と呼び、その自己に融合される対象のことを「蒼古的対象」と呼んでいる（コフート 3）。今このコフートの用語をその病理学的な文脈から外し、ホ

イットマンを考える際の有効な道具として用いてみたい。コフートによれば「蒼古的対象」とは、「それ自身自己の重要な部分として体験される対象」の（コフート iv）ことであるが、ホイットマンの詩には、この「蒼古的対象」がいたるところにあふれている。たとえば、「かつて出かける子供がいた（“There Was a Child Went Forth”）」という詩に登場する、次の場面をみてみよう。

And the March-born lambs, and the sow’s pink-faint litter, and the mare’s foal, and the cow’s calf, and the noisy brood of the barn-yard or by the mire of the pondside. . and the fish suspending themselves so curiously below there. . and the beautiful curious liq-uid. . and the water-plants with their grace-ful flat heads. . all became part of him. （Cowley 138）

この場面に列挙された数々の対象物は、病理学的な意味を外した上での「蒼古的対象」と呼ぶことができるだろう。この詩に登場する「子供」である「彼」は、目にするものすべてに同一化し（「すべては彼の一部となった」）、その事物や生物の状態や感情を味わうことができる存在として描かれている。ブラックは、先にみたように、これを退行や願望充足と結びつけて解釈するのだが、芸術というものの性格を理解する上では、むしろストー的に解釈したほうがいいだろう。

ホイットマンは、そのノートのなかで「魂あるいは精神は自己をすべてのものに送りこむ－岩のなかに送りこむと岩の生命を生き、海のなかに送りこむと、自分を海と感じるのだ」と記している。いいかえれば、自己は対象物そのもののなかに入りこみ、それを生きるのであるから、ある種の絶対的な融合が自己と対象物とのあいだに起きていると考えてよかろう。けれども、それは「魂」の世界での出来事である以上、ブラックのように、この点を無視して、フロイト的な解釈を持ち込むわけにはゆかない。ホイットマンは、さらに続けて「人間は何かに自分を同一化する（identify）ときにのみ、その何かに興味を抱くものだ」（Zweig 174）と記している。つまり、自己が蒼古的対象と一体化したときに、人間の興味が成立すると思っていたふしがある。

これは近代合理精神からすれば、自己と非自己の間に本来あるはずの裂け目が消失し、神秘的な癒着が生じていることになる。しかし、この結合は、退行としての同一化ではなくて、想像力によって感知された、魂の世界内部での創造的な同一化だと考えねばならないだろう。つまり、単純にフロイト的な解釈を持ち込んで願望の充足と解釈してしまうのではなく、想像力によって構築された「きわだった業績」の一つだと、明確に区別して考察すべきである。けれども、実はこの微妙な違いをホイットマン自身が混同しているらしく、彼の描く同一化の詩群には、つねにこの微妙なニュアンスをめぐる問題がつきまとう。まず、1846 年に発表された、最初の同一化の詩の冒頭をみてみよう。

When painfully athwart my brain
　Dark thoughts come crowding on,
And sick of worldly hollowness,
　My heart feels sad or lone－

「私」は「暗い想い」に沈んでおり、世間を「虚ろ」に感じている。「私の心」は「悲しみか孤独」を感じている。そして、そのような「私」が次にとる行動は、次の詩句にあるように、外へ出て、楽しそうに遊ぶ子供の姿を目にすることである。

O, lovely, happy children!
　I am with you in my soul ;
I shout－I strike the ball with you－
　With you I race and roll　　（Brasher 33）

「私」は幸せに遊ぶ子供の姿をみることで、「魂のなかで」子供と一体となり、彼らの行う動作を「私」も行う。子供が球を打てば、それは「私」が打ったのであり、子供が走れば「私」が走ったことになる。「私」は子供と一体化し、子供をいわば「蒼古的対象」として、自分の内側に取り込んでしまう。

詩はこのように展開してゆくのだが、この過程はしかし、どこか読者の理性に逆らう部分がある。それは、たとえ「魂のなかで」という条件をつけるにせよ、なぜ「私」が子供と同一化し、なぜ「子供」がした行為が「私」の行為となるのかという疑問がどうしてもわきあがってくるからである。

この問題を解くには、さらに別の論理が必要となるだろう。それは、こうした過程を通して、「私」が成し遂げようとしていること、その目的を明示できる論理であらねばならない。その目的を明確に示せる論理を考える上で、感情に関する議論についてみてみよう。つまり、「私」が同一化を通じて成し遂げようとしているのは、「私」の内部に感情を成立させようとしているからではないかと仮定してみよう。

そこで、まず、感情には、他の機能にない特別な性質があることを思い起こすことから始めよう。感情とは不思議な性質を有し、リクール（Paul Ricoeur）が指摘するように、それは対象を指し示すと同時に、自己の内部での変化をも表わすものなのである。

> 感情とは…間違いなく指向的なものであって、「何か」を感じとることである。しかし、これは奇妙な指向性であり、一方では事物に関して、世界に関して感じた特質を指示し、他方では自己が内面でどのような作用を受けているかを明らかにするのである。
>
> （トゥアン 22）

感情とは、その対象の性格を言い表していると同時に、自己の内面の変容をも指し示すものだといえよう。感情を味わうことによって、対象がこれこれだと感じている様相と、一方、それを味わっている主体が、その感情を味わう以前と以後では大きく変化してゆく様相がみてとれるわけである。

このリクールの議論をホイットマンの詩に当てはめるなら、「私」が「子供」をみて「可愛らしく、幸せな」と感じるのは、たんに対象である「子供」が「可愛い」というだけではなくて、そう感じることによって、「私」の内面にも変化が生じているからだろう。言い換えれば、「私」は「子供」と同一化することによって、自己の内面に変化が引き起こされるのを感じるわけである。「私」が次々に対象に同一化するのは、それによって「私」が感情を味わい、一定の快楽を感じとれるからなのである。「私」は遊んでいる「子供」を目にすることにより、「可愛い」という感情を抱く。そして、その「可愛い」という感情が、いってみれば、「私」の内部を貫き、「私」にある種の快感を与えてくれるわけである。

だが、この議論は裏を返せば、対象が登場し、それに同一化しない限り、「私」には感情が生じないということになりはしないだろうか。ホイットマンは、先の詩で「世間の虚ろさにうんざりし」と記していたが、これは本当は正確なコメントではないだろう。「虚ろ」なのは世間（外界）のほうではない。対象と同一化しない限り、何の感情も発生しない「私」のほうこそ、「虚ろ」だったのである。だから、「私」はこの「虚ろ」さを埋めるために、外へ出かけるのだ。「虚ろ」な「私」は自己の内部に感情を喚起する対象物を求めて、世間をさ迷うのである。

Ⅳ　虚ろな「私」

「私」は対象との区別がつかないほど、対象に肉薄して、その対象になりきる。言い換えれば、「私」は、コフートのいう「蒼古的対象」と出会うのである。そして、この奇妙な行為を

行うのは、「私」が虚ろであり、対象を内部に取り込まない限り、何の感情も感じられないからである。「私」は自己の内面に感情の波を引き起こすため、感情が引き起こす快楽を味わうために、蒼古的対象を探して、外界へと繰り出す。別の言い方をすれば、蒼古的対象を見つける前の「私」とは、空虚であり、そこには何もない。先に引用した詩のことばを使えば、「私」とは、端的にいって「虚ろ」な存在にすぎない。

もう少しいえば、ホイットマン自身が認めているように、「私」とは「伝導体」とでも呼べるような中身のない存在なのである。それは、感情という電気を通すだけの、ただの媒介物にすぎない。「私」は感情が生起する恍惚の情を得るために、蒼古的対象を探しまわり、それを取り込む容器であるとでも表現できるだろう。

> Mine is no callous shell,
> I have instant conductors all over me whether I pass or stop,
> They seize every object and lead it harmlessly through me. （Cowley 53）

「私」は感受性のない「殻」ではない。しかし、だからといって、何かを積極的に変容させる、主体的な存在でもない。「私」は「あらゆる対象」を「掴み取る」が、同時に「無害」なものとして通過させてしまう「瞬間伝導体」なのである。「私」の内部は空虚である。自分だけでは充足することはできない。「私」は一人でいると「孤独」に苛まれ、「暗い想い」に取りつかれる。「私」は刺激を得るために、外界へ出てゆかねばならない。伝導体に電気が不可欠であるように、「私」には自分の内部に取り込めるような対象物が必要である。だから、「私」は外で遊んでいる「子供」を眺めなければならない。彼らと想像力の仲立ちで融合することによってのみ、「私」はこの上もない満足感に浸ることができるからである。

この「蒼古的対象」との同一化によって生まれる快楽こそ、虚ろな「私」が求めているものなのである。こうした一連の営みは、もちろん、「魂」の世界の内部で、想像力を通して行われるのであって、現実に「私」が対象物になってしまうことを意味しない。「私」は誇大に膨らんで、対象物を飲み込み、そのときに生まれる悦楽の感情に夢中になりはするが、だからといって、「私」が物理的な意味で対象物と化すことはありえない。だが、虚ろな「伝導体」にすぎない「私」は、やがてこの制約条件を忘却し始める。「魂の世界で」「想像力を通して」という条件を忘れ、蒼古的対象との同一化がもたらす快楽の瞬間を求めて、ひたすら同一化を繰り返す存在となる。対象と融合するごとに、「私」の内部で感情が沸き立ち、興奮が全身を駆け抜ける。まるで麻薬のようなこの効果に「私」は夢中となり、恍惚の瞬間を味わってゆく。

別言すれば、「私」は蒼古的対象を飲み込み、食べて味わい、その食感に夢中になっているともいえるだろう。ホイットマンの描く「私」は、さまざまな蒼古的対象と融合したあと、同一化に由来する感情に酔いしれる。「私」は蒼古的対象と同一化したあと、それらの対象を「口にする」。同一化した対象を「食べる」という表現で、ホイットマンはこの恍惚の感情を次のように表現している。

> How the lank loose-gowned women looked when boated from the side of their prepared graves,
> How the silent old－faced infants, and the lifted sick, and the sharp－
> lippled unshaved men ;
> All this I swallow and it tastes good. . . . I like it well, and it becomes mine,
> I am the man. . . . I suffered. . . . I was there. （Cowley 62）

「私」は女性や男性などさまざまな対象に融合し、結合したあと、「これらすべてを私は飲み込む、それはうまい…気に入った、それは私のものになる」と述べている。まるで、フロイト心理学でいう口唇期を思わせるようなこの台詞は、「私」が蒼古的対象に対していかに夢中になり、それを味わっていたかを物語っているといえるだろう。「私」は、対象そのものを口のなかで味わい、その食感に満たされ、対象それ自体を「私のもの」としてしまうのである。

けれども、やがてこの妄想はその正体をさらけ出す。なぜなら、そもそもこうした「私」の行為は、現実ではない、想像力が支えとなった虚構の世界で成り立っているだけであり、物理的で合理的な世界のなかでは何の意味ももたないからである。先の引用の最後の行が示すように、「私」に付与された be 動詞の時制は現在（“am”）から、過去（“was”）へと移動している。つまり、「私」は明らかに時間を飛び越えて存在しており、物理的な時間は無視されている。となると、このような蒼古的対象との融合は、物理的には成立しえないといわねばなるまい。蒼古的対象との同一化を果たし、悦びの感情に満たされた「私」は、しかし、その有頂天を過ぎれば、ただ夢想のなかで遊んだだけの虚しい自分を再発見することになるだろう。果てしない同一化がもたらす激しい感情と、その恍惚の後には、虚しい自分が一人いるばかりである。そして、そのことをホイットマン自身意識していたのではないかと思われる詩がある。それは、次のような詩行に表れている。

> Somehow I have been stunned. Stand back!
> Give me a little time beyond my cuffed head and slumbers and dream and gaping,
> I discover myself on a verge of the usual mistake. （Cowley 68）

この詩にあるように、蒼古的対象に出会った「私」はそれに夢中になり、「気を失って」しまう。恍惚のなかで蒼古的対象との同一化がくれる感情に完全に圧倒されているのである。しかし、やがて「私」はそうした「夢」から覚めて、現実に直面することになる。そのとき、「私」は「いつもの間違い」に気づくのである。

対象との同一化を想像力のなかで果たすことによって、それまで「伝導体」にすぎなかった「私」の内部に感情という激しい電流が流れ、「私」はこの体験に夢中になる。次から次へと目にする対象を「私」の内部にとりこみ、外的対象はすべて蒼古的対象と化す。しかし、何度も同一化を繰り返すあいだに、「私」の現実感覚は麻痺し、ある瞬間に急激に冷めて、「私」はそうした妄想から目が覚める。そして、理性的になった「私」が見出すのは、「いつもの間違い」を犯す寸前にいる自己なのである（Black 95–6）。ここで「いつもの」と呼ばれていることからもわかるように、「私」が蒼古的対象と同一化し、それに熱狂する行為は、いわば習慣化していたと考えてもよいだろう。

ここには、フロイトが指摘した、現実から逃避した自己がその願望充足を果たすべく陥りやすい空想世界と、ストーらが指摘する願望充足を遂げるために創造される芸術的世界の両方が混在し、『草の葉』以前の危ういホイットマンの自己の内側を垣間見ているように思われる。この二つの境界線を越えれば、そこには本物の妄想が待ち受けているといえるだろう。

だから、ホイットマン自身、この二つの世界に悩まされていたわけであり、肥大化した自己と、現実をしっかり見据えた自己のあいだに、激しい葛藤をみることができるわけである。肥大化し、万能となった「私」はあらゆるものに同一化できるが、同時に、そうした蒼古的対象を見つけない限り、虚ろのままの「伝導体」にすぎない。そして、このことから生じる憂鬱な気分を排除し、万能感と生き生きとした感情を得るために、「私」はさまざまな対象物と同一化を始める。しばらくのあいだはその過程がもたらす感情に恍惚となることが許されるのだ

が、やがて、現実的な自己がその同一化は幻想にすぎぬこと、それは物理的な原則の外側にあることを見出し、ふたたび「私」は小さく縮んで、無力な自己に戻ってしまうのである。

次のホイットマンのノートの記述は、このときの沈んだ気分を描いているのではないかと考えられる。

> Everything I have done seems to me blank and suspicious. －I doubt whether my greatest thoughts, as I had supposed them, are not shallow. －and people will most likely laugh at－me－My pride is important ; my love gets no response－The complacency of nature is hateful －I am filled with restlessness－I am incomplete. （Holloway Ⅱ 89）

この記述には、Ⅰ章で指摘した「私」の万能感はもはやどこにもみられない。「私」に誇りがあるとしても、そのようなものは、他人の「嘲り」を誘うばかりであって、「私」の支えとはなりえない。さらに、「私の最もすぐれた思想」すら「浅薄」なのかも知れないと、「私」は落ち込んでいる。ホイットマンの「私」に特有の万能感や、自己愛ともとられかねないほどの自信は、ここには少しもみられない。いかなる対象をも取り込み、食してしまう強烈な「私」はなくなり、代わりに登場するのは、まるで絶望の底に沈みでもしたかのような「不完全な私」でしかない。

Ⅴ　結　　論

『草の葉』以前に、ホイットマンがじゅうぶんな才能を発揮できなかったのは、幼児的で退行的な自己の世界を創り出していたからであろう。言い換えれば、肥大化し、蒼古的対象と同一化を続け、増殖していく自己をコントロールすることができなかったのである。それに対して、『草の葉』以降では、より現実感覚に基づいた想像力によって、詩的世界の構築が可能になったのではないだろうか。

この肥大化しつつも、しっかりと現実という手綱によって制御された自己は、一群の同一化の詩をホイットマンに書かせる契機となったに違いない。初期の彼の詩の多くが、この同一化を含んでおり、詩のあちこちに蒼古的対象を容易に見出すことできる。これは、フロイト的な願望充足の世界から、ストー的な想像力による創造的世界への移行によって可能となったものであり、そのため、ホイットマンの初期の詩群には同一化の詩が多いのだと考えてもかまわないだろう。

しかし、こうした同一化の詩群は、不思議なことに、1860 年の『草の葉』第三版を境にほとんど登場しなくなる。あれほど蒼古的対象に夢中になり、それを食し、この過程がもたらす感情に熱中していたのに、こうした同一化の過程がみられるのは、もっぱら最初の三つの版だけなのである。

一般的にホイットマンの後期の詩はあまりすぐれていないという評価を受けることが多いが、それは、同時に、同一化という心理的プロセスに基づいた詩が後期にほとんどみられなくなることと関連している。蒼古的対象に熱中し、それがもたらす感情に恍惚となる「自己」が描かれなくなるや、彼の詩の魅力は半減してしまったのである。とすれば、なぜホイットマンは第三版を機に、同一化という手法を捨てたのだろうかという疑問が生じてくることになる。

この点については、さまざまな見解が考えられるだろうが、これまで検証してきた論旨からすれば、現実と想像力のあいだの危険なまでの圧迫と緊張のなかから生まれた同一化という心理構造が、より現実的で、社会的、物理的な世界と置き換わっていってしまったためではないかと思われる。それまで、いってみればある程度なら空想的に生きることが許された現実が、きわめて厳しく、過酷な現実へと一転していった背景と深い関係があると考えられる。この時

期、アメリカは、南北戦争という国家的危機に直面し、その極度の悲惨さのなかで苦しんでいた。そういう時期にあって想像力を駆使して対象に同一化するというのは、どこか現実離れした、無意味な行動に思われてしまうだろう。ホイットマン自身、南北戦争に看護兵として参加し、世界初の近代戦がもたらした悲壮な現実を体験することになる。その壮絶さは、たとえば、次のようなホイットマンの記述にも鮮明に表れているだろう。

> 大きな邸は、二階も階下も全く一杯で、なにもかも間に合わせで、秩序なく全く酷いものだった。だが、最善を尽くしたものであることは疑いない。負傷者はみな重態で、恐ろしいばかりのものもおり、古服は汚れ、血に塗れている。［・・・］瀕死の者もいた。
>
> （ホイットマン56）

このような悲惨な現実と直面しては、空想的で肥大化した自己が創り出す世界など価値がないように思われたのではないだろうか。そのため、同一化という独特の詩群が、第三版を境目としてほとんど書かれなくなってしまったのであろう。

『草の葉』最長の詩である「私自身の歌（“Song of Myself”）」とは、いってみれば、詩による「自己」の定義だと考えられるのだが、この自己を定義するという問題にホイットマンの関心が集中しているのは、近代西洋が要求し始めた個人という新たな概念につよく反応しているためだとも考えられる。そのため、ホイットマンの詩には、20世紀の心理学の用語が先駆的なかたちでちりばめられることとなる。“identity”“identification”“self”“personality”など、いずれも今日では心理学界で標準的に用いられている用語が、彼の詩でふんだんに登場するのは、おそらくこれが理由であろう。個人や自己をどのように表現し、把握するのかが、初期のホイットマンにとって重大な問題だったのである。

とすれば、彼の肥大化し、蒼古的対象を求めてさまよう「自己」は、けっして単なるエゴイズムや偏狭な自己愛の表現ではなく、むしろ、近代西洋が抱えた主体と客体の峻厳なまでの対立という哲学的課題を先回りしたかたちで表したものだとは考えられないだろうか。コフートが現代アメリカ人の肥大化した自己像（自己愛的性格者）にたいへんな関心を抱いたことと、ホイットマンの同一化の詩群が奇妙に類似することは、けっして偶然ではないのだろう。主客の対立という西洋の近代哲学が乗り越えられなかった難問が、ホイットマンの肥大化する自己には随所に見られるという意味で、彼の描く自己はただのエゴイストの自己ではなく、むしろ近代西洋の精神の主軸を貫く難題を表現したものだと結論してもよいだろう。

文　献

Asselineau, Roger. *The Evolution of Walt Whitman : The Creation of a Personality.* Cambridge : The Belknap Press of Harvard UP, 1960.

Black, Stephen A. *Whitman's Journeys into Chaos : A Psychoanalystic Study of the Poetic Process.* Princeton : Princeton UP, 1975.

Bracher, Thomas L. ed. *The Early Poems and the Fiction,* by Walt Whitman. New York : New York UP, 1963.

Brand, Dana. *The Spectator and the City in the Nineteenth-Century American Literature.* Cambridge : Cambridge UP, 1991.

Cowley, Malcolm ed. *Whitman's* Leaves of Grass *: The First（1855）Edition,* by Walt Whitman. Harmondsworth : Penguin Books, 1985.

コフート，ハインツ『自己の分析』水野信義、笠原喜監訳　みすず書房　1994年。

ホイットマン，ウォルト『ホイットマン自選日記（上）』杉本喬訳　岩波文庫　1992年。

Holloway, Emory ed. *The Uncollected Poetry and Prose of Walt Whitman,* by Walt Whitman. New York : Doubleday, Page & Compan, 1921.

Scholnick, Robert. “Whitman and the Magazines : Some Documentary Evidence,” *American Literature,* 44, 2, 1972.

Schyberg, Frederik. *Walt Whitman.* New York : Columbia UP, 1951.
トゥアン，イーフー『空間の経験：身体から都市へ』山本浩訳　ちくま学芸文庫　1993 年。
Trimble, W. H. *Walt Whitman and Leaves of Grass : An Introduction.* London : Watss & Co., 1905.
Zweig, Paul. Walt *Whitman : The Making of the Poet.* New York : Basic Books, Inc., Publishers, 1984.